

MfG_J_Nomoto_Goson

歴代の互尊文庫建物と、如是蔵博物館の一階北面中央の展示

1. 互尊翁 野本恭八郎

(1) 概要

(2) 年譜

2. 如是蔵博物館 ガイド参考資料

3. 宗教家、企業家

4. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武とおのれの言葉の訳文と補足

5. 読書の効用を説いたという「活新味」について

補足 互尊止戈と兵戈無用

補足 止戈為武、武の七つの徳、国大なりと雖も…

参考 互尊翁野本恭八郎・稻川さん著書のメモ（作成 春日）

参考 長岡高等工業設立への寄附

歴代の互尊文庫建物



1918～
現在は長岡グランドホテルと
いうから、戦後から1959年11月まで
阪之上小学校があつた場所。



戦後（明治公園）
個人的には、この右隣(北側)に
「板ヤ珠算塾」があり、少学生時代に
一時期、通つてた思い出がある。



1967～（明治公園）
空襲爆撃中心地史跡の後ろ

如是蔵博物館の一階北面中央部分の展示（2021年12月現在）
(銅像、書画の写真は、長岡開府400年 冊子より借用)



中央に互尊翁の銅像と「互尊止戈」、右に横山大觀の富士山の絵に互尊翁の讚。
左に、山本五十六の書「清修自守」、右に、心誠有れば何事か成らざらん の書
～清修自ら守る。（心を清廉潔白にして操行を失わないようにする）
～ 山本五十六記念館にある、明治天皇御製、五十六謹書の書、
「いかならむときにあふとも人はみな まことの道をふめと教へよ」に通じる。
生前も、身近に、山本五十六の好んだ言葉を掲げていたということでしょうか。

1. 互尊翁 野本恭八郎

(1) 概要

日本互尊社は昭和9年(1934)野本互尊が唱えた互尊独尊の思想を後世に伝えようと設立されました。

長岡駅東口、長岡駅の新幹線改札口から徒歩五分のとこ。
の林の中に、日本互尊社の設立による如是蔵博物館があります。
互尊文庫の創始者、野本恭八郎、互尊翁の資料を中心に、山本五十六
のコーナーもあり、長岡の偉人たちの心にふれることができます。
画家横山大観の富士山の絵に、「日に年に、世々にかかやかせ明治節、
内は独尊、外は互尊に」と署名しています。
この「内は独尊、外は互尊に」には、人はいかに生きるべきか、を問うたとき、
宇宙で唯一生きている独尊と、社会で多くの人びと一緒に生きようとする
互尊の両方が大切だという考え、野本互尊の思想の根幹だと思います。

ここでは、仏説無量寿經に見られる「互尊止戈」を中心に、
互尊翁 野本恭八郎の平和主義のベースを考えたいと思います。

尚、本稿は、長岡觀光コンベンション協会の下部組織であります、
長岡觀光ボランティアガイドの会の会報「かけはし」、2019年2月に
投稿した2ページの内容を、そのまま掲載しています。

野本恭八郎は、大正4年、現在の長岡市立図書館の母体となった
図書館を創設した人物として知られています。

文中の、木曾恵禪、星野嘉保子、山本五十六、いずれも、長岡で
活躍、あるいは長岡に誕生した人物です。

野本家のお墓は、西入寺。



如是蔵博物館

(2) 年譜

	0	刈羽郡横沢村(小国町)に生誕
1852	20	長岡町の野本家の養子
1872	28	長岡町会 副議長、六十九銀行取締役
1880	34	県会議員
1886	36	内藤久寛らと日本石油会社設立
1888	40	兄権三郎らと私立実業学校開校(竣工業(女子も入学)
1892	41	長岡電灯会社設立
1893	46	自宅を渡里町から観光院に移す
1898	48	互尊独尊の説を唱える
1900	53	土地361坪を長岡町に寄付、街はその収益を軍人家族に贈る
1905	55	次女リン28で没し、6人の子供すべてを失う
1907	60	明治節 制定を請願
1912	63	大正記念互尊文庫創設維持費を長岡市に寄付
1915	65	互尊文庫竣工
1917	67	恭八郎も参加していた令終会による悠久山公園完成
1919	70	長岡高等工業学校設立費 5000円を長岡市に寄付
1920	82	妻りい歿
1934	85	死去
1936		

2. 如是蔵博物館 ガイド参考資料

春日

個人的には、阪之上小の伝統館、長岡高校の記念資料館を含め、一緒にご案内したいところであり、長岡の教育の志をガイドするのに欠かせない展示物が多いと思っています。

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kankou/miru/siryou/nyozezou.html>

互尊文庫を創設し、明治から大正時代に学校、社会教育などの公共事業に力を注いだ実業家、野本恭八郎をはじめ長岡出身の偉人の遺品や資料などを展示しています。 山本五十六専門コーナーもあり、長岡の偉人たちの心にふれることができます。

互尊社(互尊文庫)の名の由来は、日ごろから熱心に主張していた「我人独尊皆互尊(ワレヒトドクソンミナゴソン)」の深い考えを広めようとしたとのこと。
(自分の尊さを自覚するとともに、他人を尊び敬うことが大切である)

<http://www.hnhd.co.jp/nyozezou/about/gosonsha>

日本互尊社は昭和9年(1934)野本互尊が唱えた互尊独尊の思想を後世に伝えようと設立されました。人はいかに生きるべきか。宇宙で唯一生きている独尊と、社会で多くの人びとと一緒に生きようとする互尊の両方が大切だと説いた互尊翁の資料を陳列しています。「互尊止戈」は互尊の心で戦いをやめましょうと説いています。また、画家横山大観の富士山の絵に、「日に年に、世々にかかるやかせ明治節、内は独尊、外は互尊に」と署名しています。

野本互尊翁は山本五十六をはじめ、長岡出身の人物に大きな影響を与え、陽明学者の安岡正篤とも深い親交がありました。

また、11月3日を文化の日(旧明治節)とし、富士山を国立公園とする活動をしたことでも知られています。

さらに互尊文庫という図書館を設立し、今日でも市民に利用されています。

如是蔵博物館はこの互尊翁とその生き方、考え方と共に鳴した人々の資料が収蔵されています。如是蔵とは仏教で知恵の蔵という意味です。

多くの掛け軸や、唐時代の大理石の觀音さまのレリーフ、その他の多くの觀音像
長岡は明治30年ころ石油バブルとなり、当時廃仏毀釈運動で打ち壊されそうになつた
仏像を、觀音像なら全部買い取れといった素封家がいたのです。

3. 宗教家、企業家

春日

(1) 企業家～自家の商い、経済への力点

「論語と算盤」の言葉を残した渋沢栄一より百年前、かの二宮尊徳翁も、「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寢言である」という言葉を残しました。そこで野本互尊翁ですが、長岡の石油事業への東京資本介入に断乎反対するも、兄の事業には陰の支援に回るのみ、自分の商売への距離感も、気になっておりました。恭八郎さんにも道徳と経済に関する確固とした考えがあったと思いますが、儲けには関心が薄かったようです。反町さん、羽賀さん、太刀川さん、駒形さんら、戦前からの長岡商人一族に何か共通しているものがあったのかも知れません。尊徳、栄一の二の経済と道徳の言葉に匹敵するような言葉を残していたら、知りたいです。

稼いだ仕事の多くは、貸地業。特に長岡の石油勃興前の当初の蓄財のメインは、旧藩士の持っていた資産の買い取りと土地売買では、という解説員の種村さんの説に納得しました。

兄の事業には、黒子として活動したのではないか(種村さん談)。
長岡藩は官軍に恭順せず、局外中立を主張したが入れられずに開戦して敗北。藩は領地を3分の1に減らされたため、旧藩士の困窮も、他藩と比較にならず、財産は土地のみだったと思われます。

(2) 宗教家～野本恭八郎の宗教観、特に浄土真宗との距離感

仏説無量寿經に「兵戈無用」という言葉があり、互尊止戈は、この仏説無量寿經から、考えついたことばだと思います。

「天下和順(てんげわじゅん) 日月清明(にちがつしうみょう) 風雨以時(ふううにじ)
災厲不起(さいれいふき) 国豊民安(こくふみんあん) 兵戈無用(ひょうがむよう)」
(天下和順し日月清明なり。風雨ときをもってし、災厲起こらず、国豊かに民安くして
兵戈用いることなし。)

このように、浄土真宗のお経の第一に挙げられる仏説無量寿經の中の一節です。高僧・木曾恵禪の開いた学校での、篤信の教育者・星野嘉保子ら、周囲の友人sk交流から浄土真宗に深く触れ、自らも熱心な信者でもあった野本恭八郎にも、なじみのあるお経です。彼らとの聞法の討議を通じて、これらが恭八郎の心の中に、互尊止戈として結実したように思いました。

しかし、家の宗旨であった浄土真宗にのみ傾倒するのではなく、世界教の宗祖ともいわれた互尊翁 野本恭八郎さんでした。

常に互尊翁の身近にあった浄土真宗との距離感を知りたいと思っています。

恭八郎の宗教観、特に浄土真宗との距離感の切り口として、菩提寺の西入寺で行われた互尊翁の葬儀で、他宗の僧侶を含め、五十名の出勤人数から、ひとつの宗旨に拘らなかった姿勢とみるべきでは、との解説員の種村さんの説明は、新鮮でした。

「宗教観の上に互尊」と安岡正篤氏をして言わしめたというエピソードも、ガイドに使えると思います。

春秋の注釈書『春秋左子伝』にある言葉の止戈為武（しかいぶ）、武有七徳で、武が争いを止めることにこそあることも、学んだと考えるのが自然です。

全ての子供に戦争や病で先立たれた恭八郎は、晩年、亡くなった三男と同じ年の山本五十六が帰岡し訪問してくれると、大変喜び話しかんだそうです。

「国大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ」、藩の儒家に生まれた五十六は、軍人の道に進み、この言葉を好みました。

恭八郎との対話などを通じて、武装するも「不戦・非戦」という武装中立の決意を、この言葉に託すようになったのでは、と思いたいのですが…。

おののの言葉の訳文と補足

(1) 仏典の教え、兵戈無用 (ひょうがむよう) ~仏説無量寿經の一節

- ・該当部分の現代語訳

仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに導かれないとところはない。
そこは、穏やかで國豊かに民安くして兵戈用いることなし。

(2) 仏典の教え、怨みを捨ててこそ息む (やむ) ~法句經の一節

- ・該当部分の日本語訳(仏教学者でもある中村元先生の訳)

実にこの世においては、怨みに怨みを以ってせば、ついに息むことなし。堪え忍ぶことによってこそ怨みは息む。これは永遠の真理なり。

- ・1951年のサンフランシスコ講和会議で、当時のセイロン代表も引用

人は愛によってのみ憎しみを越えられる。憎しみによっては越えられない。

敗戦国日本への賠償問題などを討議する場で、当時のセイロン代表の演説が会議の流れを決め、日本は分割統治や多くの連合国からの賠償金請求を免れることになった、日本が忘れてはならないこと。

(3) 仏典の教え、俱会一処 (くえいつしよ) ~仏説阿弥陀經の一節

- ・「俱(とも)に一つの処(ところ)で会(あ)う」というご文(もん)

兵戈無用の、究極の姿のひとつと言えると思います。

「お墓は別々のところで違うかも知れないが、阿弥陀さまのお浄土で仏さまと成って、また一緒に会えるのです。往(ゆ)く場所は皆同じです。」

(4) 儒教の教え、止戈為武 (しかいぶ) ~注釈書『春秋左子伝』の一節

- ・本来の「武」とは、戦を未然に防ぐためのもの

戈(ほこ)を止むるを武と為す、と読み下せます。「止」と「戈(ほこ)」を合わせると「武」という字になることから、「武」という字の本当の意味は「戈」を「止」める=争い・暴力を止めることであり、国の経済力を整え、インテリジェンスを高め、戦を未然に防ぐ、ということが本来の「武」。

- ・これは同じく『春秋左子伝』の「武有七徳」、武の七徳にも通じる言葉。

一、暴を禁じ。二、兵をやめ。三、大を保ち。四、功を定め。五、民を安んじ。六、衆を和し。七、財を豊かにする。(但し、武装は忘れていないと思う。)

信長の「天下布武」の真の意図は、「武有七徳」で天下泰平の世を作ること。武力による制圧ではなく、「天下に七徳の武を布き(しき)」、それにより戦のない世を作ることで、戦国終結への強い意思の表われと言われています。

4. 互尊止戈、兵戈無用と止戈為武とおのの言葉の訳文と補足

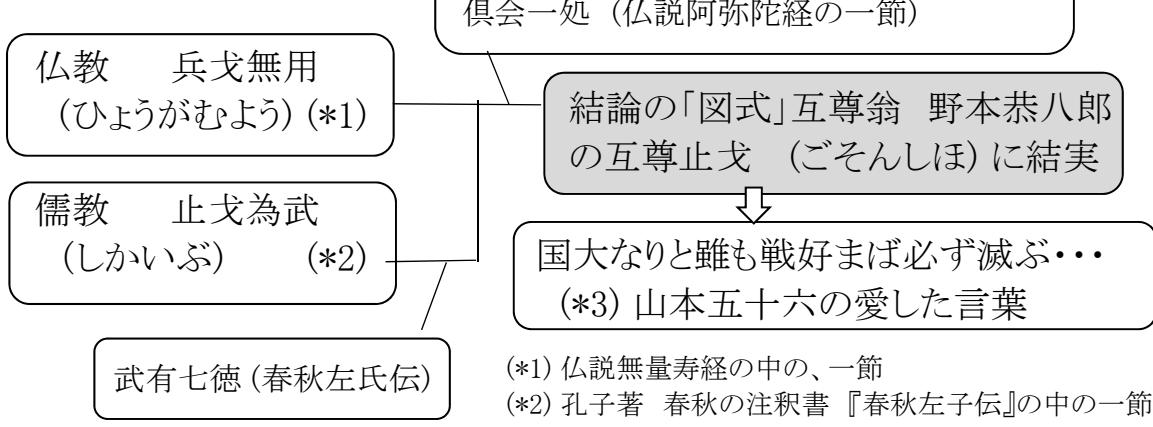
「互尊止戈」（ごそんしほ）、お互いの個性を認め合い、相互尊重の精神を貫けば戦争は止むものだ。互尊翁は、これを書にし、日本が軍事を優先し、政治の武力解決に突き進むことへの警告を発したと言われています。この互尊止戈の考え方が、どこから生まれたのか、気になっていました。

そんな中で最近、ある仏典のなかに、不戦・非戦、そのための仏教的人間形成の言葉として、「兵戈無用」（ひょうがむよう）という言葉に巡り合いました。武器も軍隊もいらない、という意味の言葉で、浄土真宗のお経の第一に挙げられる仏説無量寿経の中の一節です。学者でもあった高僧・木曾恵禪、篤信の教育者・星野嘉保子との交流から浄土真宗に深く触れ、自らも熱心な信者でもあった野本恭八郎にも、なじみのあるお経です。彼らとの聞法の討議を通じて、これらが恭八郎の心の中に、互尊止戈として結実したように思いました。

また恭八郎は、幼少時から小国の生家や藍沢南城の三余堂で儒教を学びました。春秋の注釈書『春秋左子伝』にある言葉の止戈為武（しかいぶ）、武有七徳で、武が争いを止めることにこそあることも、学んだと考えるのが自然です。全ての子供に戦争や病で先立たれた恭八郎は、晩年、亡くなった三男と同じ年の山本五十六が帰岡し訪問してくれると、大変喜び話し込んだそうです。

「国大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ」、藩の儒家に生まれた五十六は、軍人の道に進み、この言葉を好みました。恭八郎との対話などを通じて、武装するも「不戦・非戦」という武装中立の決意を、この言葉に託すようになったのでは、と思いたいのですが…。

推測の「図式」



	平和を得る道	中立	
浄土教仏典	仏の道による	非武装中立	野本恭八郎
儒教・春秋	武による	武装中立	山本五十六

5. 読書の効用を説いたという「活新味」について

「活新味」は、互尊翁が提唱した、新読、味読、活読という読書の方法です。

新読はその時代の新鮮味のある読書に触れること。そしてその新鮮な本の学びを自分だけでなく、周囲にも伝えること。

味読は味わいながら読むこと。一般に言われる精読よりもさらに深く、著者の背景も加味して読書をすること。

活読は読んだものを活かすこと。読書によって修養し行きつく先は活用であると互尊翁は言った（長岡市 Roots400 互尊翁編より）

「活新味」は、互尊文庫に掲げた標語もあります。

- 一、図書館をもってわが宝と仰ぎ、人生の記念たる思想の博覧会と知れ
- 一、図書館をもってわが宝と仰ぎ、世に立つ活人中心の自発機関と知れ
- 一、図書館をもってわが宝と仰ぎ、「活新味の読書と研究の社会道場と知れ



如是蔵博物館の脇に建つ、住まいであった本屋玄関から座敷を望んだときの写真です。如是蔵博物館読書の効用を説いたという「活新味」の書は、ここにありました。互尊文庫に相応しい言葉と思います。

人間教育（小国の山口邸見学時の感想です）

人間教育の野本恭八郎をはじめ、権三郎四兄弟を育てたのは何か、という話になった時、案内の山口育英奨学会の方から、祖母りかさんの名前が出ました兄弟が後年寄付行為に及んだ時、りかさんの名で行なったこともあったようです。息子の平三郎、そして山万で知られる長岡の豪商・山口万吉も育てた賢婦のりかさんに焦点をあてたお話を調べたいと思っています。

補足 互尊止戈と兵戈無用

互尊止戈の心を探る

恭八郎は、幼少時から、小国の生家や藍沢南城の三余堂で儒教に触れ、また養子として長岡に来てからは仏教、特に星野嘉保子、木曾恵禪との交流から浄土真宗に深く触れる時間を持ちました。

そして仏教、儒教から多くを学んだ恭八郎は、最終的に、互尊止戈という言葉に行き着きました。その履歴を辿ることはできませんが、本当に多くの人の出会い、真摯な思考の結果だと思います。

戦争や病で全ての子供に先立たれた恭八郎は、晩年、亡くなった三男と同じ年の山本五十六が帰郷のたび訪問してくれると、大変喜んだそうです。きっと「互尊止戈」、「兵戈無用」、「止戈為武」を語ったように思います。そのときの五十六の記憶が、後年、国大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ…の句を大切にした心に繋がっているのではないかとも、考えました。

(1) 互尊止戈 (ごそんしほ)

お互いの個性を認め合い、互尊の精神を貫けば戦争は止むものだと、という意味であり、互尊翁は、この言葉で、日本がややもすると軍事を優先し、政治の武力解決をはかろうとすることへの警告を発していたと思われます。

NOMOTO Kyouhachirou loved the phrase "GOSON SHIHO", meaning stop war with respect each other.

We must not give priority to military affairs in order to solve political conflict with military power.

We can avoid war state by paying respect each other.

(以下は、春日の追加意訳)

To spread this thought, we must do our best to preach Buddhism.

It is written in the Sutra of Immeasurable Life, do not kill others, do not let anyone kill others.

(2) 仏典の教え、兵戈無用 (ひょうがむよう)

仏説無量寿經のなかの一節で、武器も軍隊もいらない”という言葉です。

仏説無量寿經の中の、該当部分の抜き書き

「仏の遊履(ゆうり)したまふところの国邑(こくゆう)・丘聚(くじゅ)、化(け)を蒙(こうむ)らざるはなし。

天下和順(てんげわじゅん) 日月清明(にちがつしうみよう)

風雨以時(ふううにじ) 災厲不起(さいれいふき)

国豊民安(こくふみんあん) 兵戈無用(ひょうがむよう)」

(浄土真宗聖典註釈版73頁)

仏が歩み行かれるところは、国も町も村も、その教えに
 導かれないところはない。そのため
 (仏が歩み行かれるところは) 天下和順し日月清明なり。
 風雨ときをもってし、災厲起らず、
 国豊かに民安くして兵戈用いることなし。
 (人民)徳を崇め、仁を興し、つとめて礼讓(らいじょう)を修すと。

後の文は、国豊かにして民安(やす)く、兵戈用いることなし、とも読める。
 皆の心安らかなれば、国豊かに民安くして、兵戈用いることなし、
 この背景には、「不殺生」「殺すなけれ」という、釈尊の「殺してはならない、
 殺させてはならない」、という思想がある。

(3) 仏典の教え、怨みを捨ててこそ息む (やむ)

法句経のなかに、「怨みを捨ててこそ息む」という言葉がある。

漢訳 不可怨以怨 終以得休息。 行忍得息怨 此名如来法。

日本語訳(中村元先生の訳)

実にこの世においては、怨みに怨みを以ってせば、ついに息むことなし。
 堪え忍ぶことによってこそ怨みは息む。これは永遠の真理なり。

英訳(春日) Detestation does not cease by detestation at any time,
 it only ceases by love; this is an eternal rule from old age .

•Hatred ceases not by hatred, but by love.

人はただ愛によってのみ憎しみを越えられる。

人は憎しみによっては憎しみを越えられない。

サンフランシスコで開かれた、敗戦国日本への賠償問題などを討議する場で、
 当時のセイロン代表が言った言葉。この演説が会議の流れを決め、日本は
 分割統治や賠償金の支払いを免れることになったこととして知られる。

英文、日本語文は、鎌倉の顕彰碑のもの。

(4) 仏典の教え、俱会一処 (くえいつしょ)

兵戈無用の、究極の姿のひとつと言える。

『仏説阿弥陀経』に出てくる「俱(とも)に一つの処(ところ)で会(あ)う」と
 いうご文(もん)で、浄土教の往生の利益の一つ。

阿弥陀仏の極楽浄土に往生したものは皆、浄土の仏・菩薩たちと一緒に
 出会うことができる、という意味である。

『仏説阿弥陀経』に、

「舍利弗。衆生聞者。応當發願。願生彼國。所以者何。得與如是。
 諸上善人。俱會一處。舍利弗。不可以少善根。福德因縁。得生彼國。」
 「舍利弗、衆生聞かんもの、まさに發願してかの国に生ぜんと願ふべし。
 ゆゑはいかん。かくのごときの諸上善人とともに一處に会することを
 得ればなり。舍利弗、少善根福德の因縁をもつてかの国に生ずることを
 得べからず。」

(浄土真宗聖典註釈版 124ページ)

「お墓は別々のところで違うかもしれんけど、往(ゆ)く場所は
 おんなじなんよ。阿弥陀さまのお淨土で仏さまに成って、
 また一緒に会えるんよ」

この世ではお互いの「思い」を通そうと憎み合ったり争ったりします。
 しかし、私たちが還(かえ)る世界は皆一つ「淨土(静かな平和な一つ世界)」
 なのです。

補足 止戈為武、武の七つの徳、国大なりと雖も…

『春秋左子伝』の止戈為武、新渡戸稻造『武士道』の「七つの徳」、そして山本五十六が好んで揮毫した言葉の「国大なりと雖も」

(1) 儒教の教え、止戈為武 (しかいぶ)

孔子著 春秋の注釈書 『春秋左子伝』宣公(せんこう)一二年に
「止戈為武(しかいぶ)」という言葉があるそうです。

恭八郎は、幼少時、藍沢南城の三余堂で学びましたが、
そのとき儒教に触れており、この言葉を知ったかも、と思っています。

止戈為武は、戈(ほこ)を止むるを武と為す、と読み下せます。

「止」と「戈(ほこ)」の2字を合わせると「武」という字になることから、「武」という字の本当の意味は「戈」を「止」める=争い・暴力を止めることであるという意味であり、そのため、国の経済力を整え、インテリジェンスを高め、戦を未然に防ぐ、ということこそ、武である、ということ。

(2) 儒教の教え、武有七徳

「武有七徳」、武の七徳

一、暴を禁じ

二、兵をやめ

三、大を保ち

四、功を定め

五、民を安んじ

六、衆を和し

七、財を豊かにす

武力行使を禁じ、武器をしまい、大国を保全し、君主の功業を固め、人民の生活を安定させ、大衆を仲良くさせ、経済を繁栄させること。

これも、春秋左氏伝・宣公一二年にある訓えであり、

武の精神を通じて治国平天下の行政的心法施策である。

但し、武力行使を禁じ、武器をしまい、とは言え、武装は忘れていないと思う。

「天下布武」は、信長が自身の印章に用いた文言として知られているが、

「天下布武」の本当の意味は、「天下に七徳の武を布く(しく)」ということで、それにより天下泰平の世を作る、という決意表明であり、武有七徳の心に近い。

新渡戸稻造は著作『武士道』の中で「七つの徳」として、

Justice(義), Courage(勇), Benevolence(仁), Politeness(礼),

Truthfulness(誠), Honor(名譽), Loyalty(忠義)を挙げている。

これは、「武有七徳」とは、同じ七つの徳とはいえ、考えが違うようである。

(3) 兵書「司馬法」の一節、國大なりと雖も…

山本五十六が好んで揮毫した言葉であり、中国の兵書「司馬法」の一節の
國大なりと雖も戦好まば必ず滅ぶ。

国安らかなりと雖も戦忘れなば必ず危うし。

Even if a country is a powerful nation and always in wars,
it becomes destruction.

Even if the world is peace and she forget a fight,
a country becomes in danger.

これも、止戈為武から導かれる、ひとつの覚悟とも言える。

この言葉には、さらにその前段があり、そこには次のように書かれている。

戦道不違時 不歴民病 所以愛吾民也

不加喪不因凶 所以愛夫其民也 冬夏不興師 所以兼愛民也

故国雖大 好戦必亡 天下雖安 忘戦必危

(読み下し)

戦いの道は時に違(たが)えず、民の病(うれい)を歴(へ)ず、
吾が民を愛する所以(ゆえん)なり。

喪を加えず、凶に因らず、夫其(ふそ)の民を愛する所以なり。

冬夏に師を興(おこ)さず、民を兼愛(けんあい)する所以なり。

故に国が大なりといえども、戦を好めば必ず亡(ほろ)ぶ。

天下安らかなりといえども、戦を忘れれば必ず危うし。

参考 互尊翁野本恭八郎・稻川さん著書のメモ（作成 春日）

21	誠之社	37	祖母 リカ
31	こくしょう、のっぺ	41	長岡藩と上の山藩
43	山口家、吉川から山口へ	48	三余堂 南城
105	神田町の商人は信州出身者が 多く、薬や紙の行商を得意とする	52	梅浦精一(IHI設立)
106	神田小村屋の万金丹	256	石油
114	共愛社と誠之社	267	鉄道
118	士族学校の阪之上校	263	星野嘉保子
119	誠之社の趣意文	268	木曾恵禪、長永寺齋外齋
121	誠之社のメンバー	269	興学私議
136	茨木眼科が剣道稽古相手	269	人主
140	野撲・質撲剛健	271	交詢社
141	国立銀行	270	求志洞遺稿
145	長岡洋学校・誠意塾	272	長岡商業諮詢会
148	誠之社	273	父の死、養母の死
148	鳥屋・目黒書店	274	浄土真宗に復帰、西入寺
149	松風堂書店	275	継之助の誠義の心
151	西入寺	274	六人の子の死、火災
153	遠藤大太郎	287	権三郎 私立実業学校設立
160	二番ムコ	290	実業学校閉校の理由
164	三島億二郎	297	長岡銀行
167	大橋書房	309	長盛座 修身懇話会
167	覚張書店	316	長岡市市制
171	由善会・尚志会	318	山田又七の宝田石油
173	北越興商会	328	長岡 市制施行と近代産業
177	大橋佐平・博文館	319	浅野総一郎
177	明治の平均寿命	305	重油処分と電灯会社
191	父平三郎の弟・万吉	338	日新富有
196	鋸儲け	342	高頭仁兵衛と三余堂
196	米百俵	346	図書館会館大正六年
205	しようゆの実	349	大洪水・大正二年
206	花火	354	三百年祭
211	行在所	355	宝光院、良寛の句碑
213	改進党・士族	353	藤井界雄
215	山口兄弟	359	寺崎礦業 富岳の絵
236	井上円了と仏教講談会	374	北越産業無尽 後の大光
237	長興寺住職・大道長安	380	八十里越え
243	救世志会と浄土真宗	385	互尊止戈、互尊の心で戦いをやめよう
249	内藤久寛	393	日本互尊社設立・昭和9年(1934)
254	権三郎 鉄道から石油へ 誠之社、殖産協会、北越交詢社	昭和11年(1936), 85才で歿 昭和20年(1945) 空襲で互尊文庫焼失	

「活新妹」は読書の効用をいう

日本互尊社は昭和9年(1934)、野本互尊翁|野本互尊が唱えた互尊独尊の思想を後世に伝えようと設立された。

人はいかに生きるべきか。宇宙で唯一生きている独尊と、社会で多くの人びと一緒に生きようとする互尊の両方が大切だと説いた互尊翁の資料を陳列。

「互尊止戈」は互尊の心で戦いをやめようといい、「活新妹」は読書の効用を説いている。また画家横山大観の富士山の絵に、「日に年に、世々にかかるやかせ明治節、内は独尊、外は互尊に」と署名している。

参考 長岡高等工業設立への寄附

1917 互尊文庫施工

1920 長岡高等工業学校設立費 5,000円寄附

～ 地元負担金の約1バーセントに相当。

1923年12月10日：勅令第501号文部省直轄諸学校官制改正により
長岡高等工業学校設置。

1924年2月：長岡高等工業学校規則制定。本科（修業年限3年）に
電気工学科・機械工学科・応用化学科の3科を設置。

1924年4月12日：第1回入学宣誓式。14日、授業開始。



長岡高等工業学校
開校10周年記念絵葉書
(戦後、新潟大学工学部)

1924(大正13年) 長岡高等工業学校

工業の発展を願う長岡市は、明治40年代以降、高等工業学校の誘致に取り組みました。その結果、ようやく大正9年(1920)に設置が内定しました。文部省は敷地を四郎丸町に決め、その敷地18,000坪(約6万m²)並びに建設費は県と市が寄付しました。

この年の4月12日、112人の新入生を迎えて、第1回入学式が行われました。

1923年3月：新潟県、内務大臣に地元負担金 47.5万円・土地18000坪の寄附を申請。47.5万円を県・長岡市で折半して負担。

このエリアが、新潟大学工学部キャンパスに引き継がれ、1980年代の大学の新潟市総合に伴って工学部新潟市五十嵐キャンパスに移転しました。

それに伴い、このエリアが長岡市に返還され、この場所が互尊文庫を市立図書館分館とする長岡市中央図書館、そして中央体育館、中央公園となりました。